

## 文学部人文学科社会学専攻で「社会調査士」の資格が可能に



▲戦争・平和博物館調査の一環で「ひめゆり平和祈念資料館」を訪問し、体験者に聞く

「社会調査士」資格制度がスタートし、文学部人文学科社会学専攻は「社会調査認定機構」(03年11月発足)から科目認定を受けた。必要な科目を受講し単位認定を受けた学生は、同機構に申請することで「社会調査士」としての資格を得ることが出来る。変動著しい市場の傾向や社会意識の変化の実態をつかみ、未来を予測するために必要なのが「社会調査」だ。「小泉政権を支持する—賛成▽▽%、反対◇◇%」といったメディアの世論調査や企業の市場調査、国勢調査、国や地方自治体の実態調査や意識調査など社会調査はさまざまな分野で行われているが、その存在は重要になってきており、質の向上、人材の育成が求められている。

本学では同専攻の教員9人全員が「専門社会調査士」の資格を取得しており、万全の体制で社会調査教育に当たっている。資格取得には、社会調査の基本的事項、調査設計と調査の実施方法、基本的な資料とデータの分析、社会調査に必要な統計学、量的データ解析の方法、質的な分析の方法を身につけ、調査の企画立案から報告書作成までの社会調査全課程を体験(実習)する。

同資格を念頭に置いて勉強中の嶋根克己ゼミの尾崎研司くん(3年)は「学んできたことが進路に生かされるといい。調査を行うことによって座学が認識できる点にやりがいを感じます」。同じく姉崎将裕くん(3年)は「社会調査に関する科目は1年次の時から『取りあえず』という気持ちで受講してきました。しかし、何となく学んでいた知識でも、モノに対する見方を学ぶことによって自分のスキルとなって表れてくるのではないかと思います」と話している。

---

## 嶋根克己ゼミ公開ゼミ発表会



嶋根克己ゼミ(文学部人文学科社会学専攻)の公開ゼミ発表会が1月14日、生田キャンパスで開かれた。「社会意識—現代文化の研究」をテーマにしている同ゼミの3年次生8人が2チームに分かれて研究発表をし、2年次・4年次生、院生が評価し合うという初の試み。2チームのテーマは「日本の情報教育の現状」と「家族の行く末」。いずれも

テーマは今日的だが、前者がパワーポイントを利用して、後者は模造紙に手書きという手法で報告。それぞれの個性が生かされた発表会となり、会場からは内容への質問や提案が活発に出された＝写真。

同ゼミは前期に大矢根淳ゼミに「挑戦」を申し入れてのジョイント発表会も開催した。嶋根教授は「リサーチし、かつ『深く考える』ことが社会学の意義であるという認識を新たにしてほしい。同時にゼミ活動の方向性を模索している学生にとってささやかな一歩となったのでは」と語っている。

---

## ゼミ連主催学内大会

『専大の夜明け～今、めざめよ専大生～』

経済・経営・商学部のゼミナール連合会(ゼミ連)に所属する学生が企画した学内討論会が11月14日、7社からの講師と80人の学生が参加して生田キャンパスで行われた。

(株)三井住友銀行の方からは、金融業界の理解を深める講演と、業界への就職を希望する学生へのアドバイスなどが、NHK『英語でしゃべらナイト』広報担当のプロデューサーからは、マスコミ志望学生向けに自己アピール方法などを教えてもらうことが出来た。参加者はこれまで学んできたことが社会や企業の現場でどのように実践され、活用されているのかを目的意識をもって積極的に発言、議論していた。本音で話し合いが出来、今までの疑問を解消出来たと思う。長時間にもかかわらず、熱心に講師の話に耳を傾け、質問をぶつける姿は、改めて専大生の目的意識の高さを証明することが出来た企画だった。講師の方も「学生と直接話すことが出来、有意義だった」と話してくださり、学生からも「企業理解を深め、今後に生かしていきたい」といった声があった。『ゼミ連』の活動を多くの学生に知ってもらい、今後はさらに学内討論会を活発にしていきたい。(実行委員＝経営3・望月敬介／商3・小池隆広)

---

## 韓国・湖南大との協定を記念し講演と体験発表



文学部と韓国の湖南大学校人文教育大学との国際交流組織間協定(11月号既報)を記念した講演会が12月15日、生田キャンパスで行われた。

荒木敏夫文学部長は「相手国の文化を知ることで、改めて自国を知ることが出来る。今回をきっかけに多くの学生に交流の機会を持ってほしい」と、あいさつした。

9月に湖南大学で試験的に行われた日本語教育実習に参加した今野良美さんと八巻あゆみさん(いずれも3年次・備前徹ゼミ)の発表では、「上級クラスは全員、日本への留学経験があり、レベルが高かった」(八巻)、「チューターがついてくれたので生活面の不安はなく、持参した『折り紙』で交流を図った」(今野)といった体験を語った。2人とも日本語教育法だけではなく、異文化交流による体験から得たものが大きかったことを強調した＝写真。

記念講演では、本学で博士の学位を取得した同大の外国語学科日本語学専攻の金敬鎬教授(平10院文博)が「韓国における日本語教育」の歴史、現状、展望について流暢な日本語で解説。海外で日本語を学ぶ人の約4割が韓国に集中しており、アニメ等の影響で高校生が最も多く学んでいるが、日本語教師が圧倒的に不足していることや、新たな日本語教授法の開発の必要性と日本語を「母語」とする指導者が求められていることを話し、「韓国で日本語を教えてみませんか」と結んだ。

【ニュース専修2005年2月号5面】